

爰ニ仕舞置候トテ、巾著ヨリ取出シ差上候ヘバ、利勝是ヲ取給ヒテ、脇差ノ下緒ノ先ノホドケシヲク、リ給ヒ、家老寺田與左衛門ヲ呼デ、是ヲ見候、三年以前ニ唐糸ノ切ヲ拾ヒテ、仁兵衛ニ預ケ置シニ、夫ヲ大切ニ致シ置、只今尋候ヘバ、巾著ノ中ヨリ取出シ候、預ケシ時外ノ者共ハ、我ヲシワキ者ト云フ、アノ糸何ノ用ニ立ベキゾト笑ヒシ者多キ中ニ、主ノ詞ヲ斯ノ如クニ、大切ニ相守リシ事、奇特千萬也候故、知行三百石取ラスベキ也、其段申渡スベク候、此糸切ヲ我大切ニ思ヒ候ワケヲ、皆々ヘ語り聞スベシ、此糸ハ元來唐土ノ主民ノ手ニテ、桑ヲトリ蠶ヲ飼ヒテ糸ニ成シテ、唐土ノ商人ノ手ニ渡リ、遙カノ海路ヲ經テ、日本ノ地ニ渡リテ、長崎ノ商人ノ手ニ入、夫ヨリ京大坂ノ町人買取、江戸迄下リシ物ナレバ、イカ計カト存候ゾ、左様ノ苦勞ニテ出來候物ヲ、少シキナレバトテ、塵ニカシ棄ル事、誠ニ天ノ咎メモ恐敷也、今下ゲ緒ノ先ヲク、リ候ヘバ、費無ト笑ヒシガ、我一尺ニ足ヌ唐糸ヲ、三百石ノ知行ニテ、買取タルトゾ云レケル、

〔大猷院殿御實紀附録〕二公○德川家無用の浮費をば減省ありて、専ら儉素をもて、天下大小の事を御沙汰ありしなり、寛永十四年八月、本城御移徙の式行はれ、老臣はじめ饗賜ひしとき、構造の奉行等召出され、こたび新造の結構華麗に過たり、天下に儉を示す本意に非ず、華飾の所に速に毀ちすて、今より後はいよ／＼家室に華美を用ひまじきむね、面命せられければ、きく者みな戰慄せりとぞ、おなじ十五年九月、千代姫君尾藩へ御入興の事仰出されし頃、名古屋へ阿部對馬守重次御使し、明年御入興により、第宅華美に結構せらる、よし聞し召れぬ、されども天下教戒の爲にも、麗美を省かれ、いかにも手軽く構營あるべしと仰下され、また十六年四月、白木書院に出まし、三家はじめ万石以上の輩を、こゝ／＼御前に召て、世の中のさま、年を追て奢侈の風にうつりゆくよし聞ゆれば、まば／＼制禁を令せらるれども、なほ華美の事おほし、今より後各國において、彌儉約を守り沙汰すべしと、面諭あり、此外にも番頭、物頭、目付等をめし出で、儉令を懇諭